

地理歴史

1 高等学校学習指導要領の改訂に向けて（中央教育審議会答申より）

(1) 改善の方向性

中央教育審議会答申（以下「答申」という。）では、社会科、地理歴史科、公民科の課題を次のように整理している。

- ・主体的に社会の形成に参画しようとする態度や資料から読み取った情報を基にして、社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であること。
- ・社会的な見方や考え方について、その全体像が不明確であり、それを養うための具体策が定着するには至っていないこと。
- ・近現代に関する学習の定着状況が低い傾向にあること。
- ・課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていないこと。

社会科、地理歴史科、公民科においては、上記の課題を踏まえ、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し、知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育てていくことが求められる。

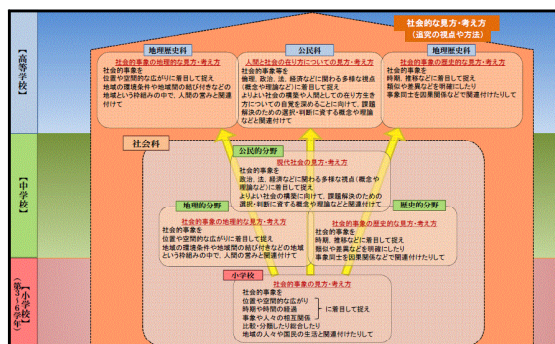
これを踏まえ、社会科、地理歴史科、公民科における教育目標は、従前の目標の趣旨を勘案して「公民としての資質・能力」を育成することを目指し、その資質・能力の具体的な内容を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で整理する。その際、高等学校地理歴史科、公民科では、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を育成することが必要である。

(2) 具体的な改善事項

ア 資質・能力を育成する学びの過程についての考え方

三つの柱に沿った資質・能力を育成するためには、課題を追究したり解決したりする活動の充実が求められる。そうした学習活動を充実させるための学習過程の例としては、大きくは課題把握、課題追究、課題解決の三つが考えられる。また、それらを構成する活動の例としては、動機付けや方向付け、情報収集や考察・構想、まとめや振り返りなどの活動が考えられる。

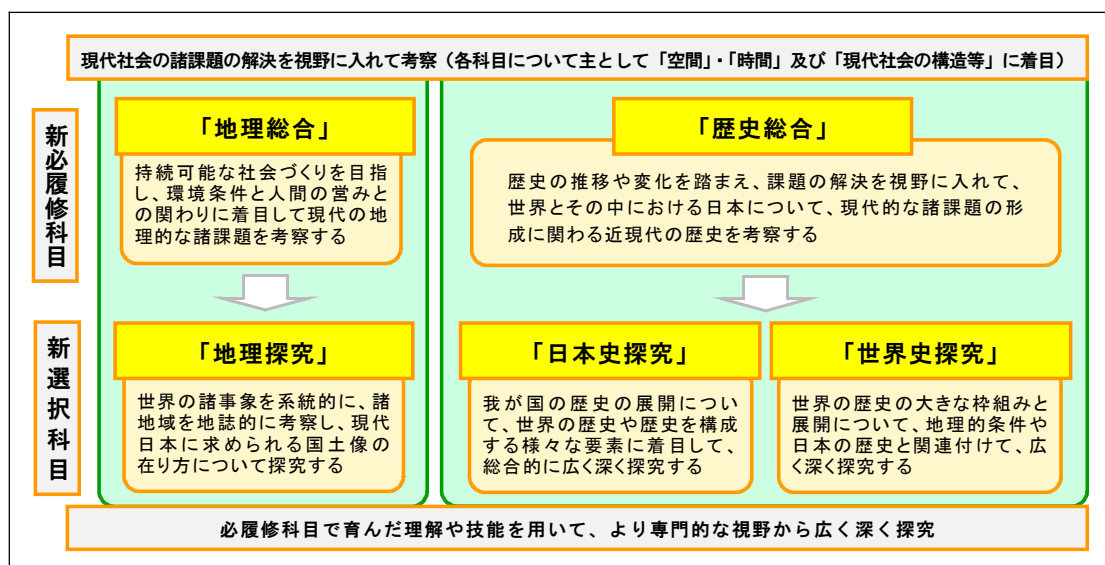
これらの活動において、時間、空間、相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、特色や意味、理論などの概念等に関する知識を身に付けるために、社会的事象等を見たり考えたりする際の視点や方法である「社会的な見方・考え方」（図1）を働かせることが必要となる。



【図1】（答申資料 別添3-4より）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_3_1.pdf

イ 科目構成の見直し

地理歴史科の科目構成を見直し、共通必修履修科目としての「歴史総合」と「地理総合」を設置し、選択履修科目として「日本史探究」、「世界史探究」及び「地理探究」を設置する（図2）。



【図2】（答申資料 別添資料3-7より作成）

ウ 学習・指導の改善充実（「主体的・対話的で深い学び」の実現）

(ア) 「主体的な学び」の視点

主体的な学びについては、生徒が学習課題を把握しその解決への見通しを持つことが必要である。そのためには、単元等を通じた学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに、学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し、生徒の表現を促すようにすることなどが重要である。

(イ) 「対話的な学び」の視点

対話的な学びについては、話合いの指導が十分に行われずグループによる活動が優先し内容が深まらないといった課題が指摘される場所であり、深い学びとの関わりに留意し、その改善を図ることが求められる。

(ウ) 「深い学び」の視点

深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。具体的には、教科・科目及び分野の特質に根ざした追究の視点と、それを生かした課題（問い）の設定、諸資料等を基にした多面的・多角的な考察、社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断）、論理的な説明、合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論などを通し、主として用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計することが求められる。

2 資質・能力を育成する学習指導の改善・充実

(1) 学習指導の改善・充実を図るための教科研修の例

これからの教員には、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善や教材研究、学習評価の改善・充実などに必要な力等が求められる。そのため、校内の研修体制の一層の充実を図ることが重要である。ここでは、学習指導の改善・充実を図るための教科研修の例を示す。(☐は「主体的な学び」、☒は「対話的な学び」、☑は「深い学び」以下同)

① 研修テーマの設定

研修テーマ「学習課題（問い）は、生徒の考察・追究・探究を促すために有効なものであったか」を設定した。

② 研究授業（地理B）の実施

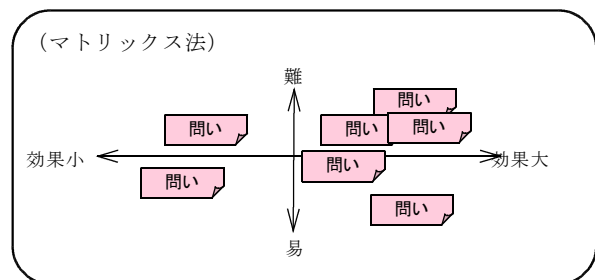
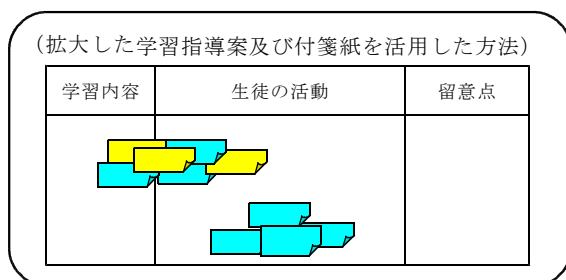
参観者は、水色の付箋紙に「生徒の考察・追究・探究が進んでいた様子」を、黄色の付箋紙に「生徒の考察・追究が停滞した様子」を記入することとした。

単 元 名	現代世界の諸地域								
単 元 の 目 標	現代世界の諸地域を取り上げ、歴史的背景を踏まえて多面的・多角的に地域の変容や構造を考察し、それらの地域に見られる地域的特色や地球的課題について理解させるとともに、地誌的に考察する方法を身に付けさせる。								
本 時 の 目 標	カナダとオーストラリアを比較し関連付けることを通して、州・大陸規模の地域を地誌的にとらえる視点や方法を身に付ける。								
評 価 規 準	カナダとオーストラリアに関する資料を適切に収集し、有用な情報を適切に選択し、まとめている。【技】								
本 時 の 展 開（20時間のうち1時間目）									
過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点等						
導入 (7分)	○本時の学習内容の確認 ○比較方法の検討	【問い①】異なる二つの地域を比較するためには、どのような情報を整理すればよいだろうか。	○生徒が「問い①」を思考するために、身近な例として「北海道と沖縄の違いは何だろうか」などの問いかけをする。						
		○「問い①」について思考した内容を隣の座席の生徒と意見交換する。(5分) ☒ ○共通点と相違点に分類することを理解する。(2分)							
展開 (38分)	○資料の収集	【問い②】カナダとオーストラリアの共通点と相違点はそれぞれ何だろうか。	1 自然環境、産業、生活文化などに関する共通点 <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>カナダ</td> <td>項目</td> <td>オーストラリア</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </table>	カナダ	項目	オーストラリア			
		カナダ		項目	オーストラリア				
まとめ (5分)	○本時の学習内容のまとめ	○教科書や地図帳などから、二つの国における自然環境、産業、生活文化などに関する資料を収集する。(10分) ☐	○自然、政治、経済、文化など多面的・多角的に考察していることに着目して評価する。						
		○比較・分析した結果を自分の言葉でワークシートにまとめる。(5分) ☐・☑							

③ 研究協議の実施

拡大した学習指導案を使用し、以下の流れで協議を実施した。

協議テーマ	学習課題（問い）は、生徒の考察・追究・探究を促すために有効なものであったか
項 目	内 容
○ 研究授業で書き出した付箋紙の共有（15分）	○ 参加者が授業を見ながら記入した付箋紙を拡大した学習指導案に貼り、授業中の生徒の学習活動の様子を共有する。 ○ 二色の付箋紙が混在したところを中心に、本時の学習課題（問い）は生徒の考察・追究・探究を促すために有効であったか協議する。【付箋紙の活用】 ○ 日本史A「現代日本の政治と国際社会」の単元、世界史A「ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成」の単元において、どのような学習課題（問い）が考えられるかを書き出し、検討する。【マトリックス法の活用】
○ 協議（15分）	
○ 学習課題（問い）の検討（20分）	



④ 改善の方向性

- ・協議で考えた学習課題（問い）を授業で示し、その授業について検証する教科研修（2次）を実施する。
- ・研修の前後に授業評価（生徒アンケート）を実施し、改善内容の妥当性を評価する。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実践例

前項で示した課題の解決に向け、学習指導の改善・充実を図った指導例を示す。

ア 「世界史A」の学習指導の例

－単元の指導と評価の計画－

【単元の目標と評価の観点の例】(一部)				
単元名	世界戦争と平和 (12時間)			
単元の目標	帝国主義諸国の抗争とアジア・アフリカの対応、二つの世界大戦の原因と総力戦としての性格、それらが世界と日本に及ぼした影響を理解し、19世紀後期から20世紀前半までの世界の動向と平和の意義について考察する。 単元を中心とする問い：なぜ、世界大戦はくり返されたのか。			
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用 of 技能	知識・理解
評価規準	帝国主義諸国の抗争とアジア・アフリカの対応、第一次世界大戦と第二次世界大戦が及ぼした影響と平和の意義などに対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	帝国主義諸国の抗争とアジア・アフリカの対応、第一次世界大戦と第二次世界大戦が及ぼした影響と平和の意義などについて、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	帝国主義諸国の抗争とアジア・アフリカの対応、第一次世界大戦と第二次世界大戦が及ぼした影響と平和の意義などに関する資料から、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	帝国主義諸国の抗争とアジア・アフリカの対応、第一次世界大戦と第二次世界大戦が及ぼした影響と平和の意義などを理解し、その知識を身に付けている。
次程	学習内容と問い			評価の観点 関 思 技 知
第8次	【学習内容】世界恐慌が戦間期の国際秩序に危機をもたらし、新たな国際対立を生み出したことを理解する。			
	【本時の中心となる問い】世界恐慌が生み出した新たな国際対立は何か。			

1 本時の目標			
(1) アメリカ合衆国で起きた恐慌が、世界に与えた影響を理解する。			
(2) 主要国の恐慌対策について理解する。			
2 本時の展開 (12時間予定の8時間目)			
過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入	○本時の学習内容の確認	○本時の課題(問い②)をノートに記入する。	○本時の目標を踏まえた学習課題(問い)を設定する。
展開	【問い①】1929年に何が起きたのか。		
	○世界恐慌	○1928年から1935年における主要国の工業生産指数を見て、1929年に気が付くことを、ワークシートに記入する。 ○アメリカ合衆国で起きた恐慌が世界に広がった概要を理解する。	○グループ(4名)活動
【問い②】世界恐慌が生み出した新たな国際対立は何か。			
	○世界恐慌に対する主要国の対応	○世界恐慌に対するアメリカ合衆国、イギリス、ドイツ、フランスの対応について調べる。 ※ジグソー法などを活用	○グループ内で左の4カ国をそれぞれ調べる担当者を決め、国別のグループに分かれて理解させる。
	○国際対立	○世界恐慌に対する主要国の対応をもとに、グループ内で世界恐慌が生み出した新たな国際対立を考え、発表する。☒	○はじめの班に戻り、各国の担当者が理解した内容を発表させる。
まとめ	○本時の学習内容のまとめ	○本時の学習課題(問い②)をノートにまとめる。 ☒・☒	○個人活動
【問い③】TPPとブロック経済の類似点と相違点は何か。			
		○学習課題(問い③)をワークシートに記入する。	

教材活用の工夫

○ 社会との関わりを意識して、学習のまとめとして、「社会的な見方・考え方」を働かせて、TPPとブロック経済の類似点と相違点を考察させたこと。

【ワークシート】

○ 次の表から、気が付いたことを記入しよう。

	アメリカ	イギリス	ドイツ	フランス
1928年	93	94	99	92
1929年	100	100	100	100
1930年	81	92	86	100
1931年	68	84	68	86
1932年	54	84	53	72
1933年	64	88	61	81
1934年	66	99	80	75
1935年	76	106	94	73

主要国の鉱工業生産指数 (1929年=100)

○ 世界恐慌に対するそれぞれの国の対応をまとめよう。

アメリカ	
イギリス	
ドイツ	
フランス	

○ 世界恐慌を契機とした新たな国際対立をグループでまとめよう。

--	--

○ TPPとブロック経済の類似点と相違点をまとめよう。

類似点	
相違点	

イ 「日本史B」の学習指導の例

－単元の指導と評価の計画－

【単元の目標と評価の観点の例】(一部)				
単元名	中世社会の展開 (9時間)			
単元の目標	日本の諸地域の動向、日明貿易など東アジア世界との関係、産業経済の発展、庶民の台頭と下剋上、武家文化と公家文化のかかわりや庶民文化の萌芽に着目して、中世社会の多様な展開、文化の特色とその成立の背景について考察する。 単元を中心となる問い：中世社会はどのように変貌し、その特色は近世社会にどのようにつながるのだろうか。			
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
評価規準	中世国家と社会や文化の特色に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究しようとしている。	中世社会の多様な展開、文化の特色とその成立の背景から課題を見だし、日明貿易など東アジアとの関係に関連付けて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	中世国家と社会や文化の特色に関する情報を読み取ったり図表などにまとめている。	中世社会の多様な展開、文化の特色とその成立の背景についての基本的な事柄を、日明貿易など東アジアとの関係と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。
次程	学習内容と問い			評価の観点 関 思 技 知
第1次	【学習内容】建武の新政について、諸資料を活用しワークシートにまとめ、中世社会の展開について課題意識を高める。 【本時の中心となる問い】建武の新政が短期間で崩壊した原因は何か。			◎ ◎

1 本時の目標

(1) 鎌倉幕府の滅亡から建武の新政に至る過程について理解する。

(2) 建武の新政が短期間で崩壊した原因について、諸資料を活用しながら考察する。

2 本時の展開 (9時間予定の1時間目)

過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入	○前時の復習	○前時の学習内容の要点(鎌倉幕府の衰退)を確認する。	
	【問い①】後醍醐天皇はどのような人物なのだろうか。	○後醍醐天皇の即位と鎌倉幕府の滅亡	○ワークシートに書かせたり、発表させたりすることにより、学習内容に能動的に関わる意識を持たせる。
展開	○建武の新政の展開と崩壊	○建武の新政の展開について理解する。	
	【問い②】建武の新政が短期間で崩壊した原因は何か。	○グループごとに、「問い②」について諸資料を基に有用な情報を読み取り、考察した結果をワークシートにまとめる。 ※資料の例 ①梅松論 ②二条河原落書 ③若狭国太良荘百姓等言上状	○武家や公家、農民などそれぞれの視点を踏まえて考察させる。
	○考察結果の交流 ○発表内容のまとめ	○「問い②」について、グループでまとめた内容を発表する。 図 ○他のグループが発表した内容をワークシートにまとめる。 田・深	○建武の新政が短期間で崩壊した原因について、多角的・多面的に考察することができるところに着目して評価する。
まとめ	【問い③】建武の新政の崩壊は、その後の政治や社会にどのような影響を及ぼしたのか。	○建武の新政以降の政治と社会	○建武の新政以降の政治と社会について関心を高めさせる。

教材活用の工夫

- 諸資料を基に多面的・多角的に考察させるとともに、本単元への動機付けを図り、課題意識を醸成させたこと。

【ワークシート】

- 後醍醐天皇について、肖像画を見て気付いたことや、知っていることをまとめよう。

肖像画から気付いたこと	
知っていること	
他の人から出た意見	

- 建武の新政に対する人々の思いが分かる箇所を資料から読み取る。また、読み取った内容から、建武の新政が短期間で崩壊した原因を考察しよう。

建武の新政に対する人々の思い	建武の新政が短期間で崩壊した原因

- 他のグループの発表をまとめよう。

建武の新政に対する人々の思い	建武の新政が短期間で崩壊した原因

- 建武の新政の崩壊は、その後の政治や社会にどのような影響を及ぼしたと思いますか。また、本時の学習で学んだことを参考に、建武の新政以降の政治と社会について学びたいと思うことを書いてみよう。

--

ウ 「地理B」の学習指導の例

－単元の指導と評価の計画－

【単元の目標と評価の観点の例】(一部)				
単元名	自然環境 (26時間)			
単元の目標	世界の地形、気候、植生などに関する諸事象を取り上げ、それらの分布や人間生活とのかかわりなどについて考察するとともに、現代世界の環境問題を大観する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;">単元を中心とする問い：自然環境は世界各地の人々の生活にどのような影響を与えているのだろうか。</div>			
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
評価規準	世界の自然環境に対する関心と課題意識を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	世界の自然環境について、分布や人間生活との関わりなどを系統地理的に考察し、環境問題を大観させ、その過程や結果を適切に表現している。	世界の自然環境に関する諸資料を収集し、有用な情報を選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	世界の自然環境について、分布や人間生活との関わりなどとともに環境問題や、系統地理的に捉える視点や考察方法を理解し、その知識を身に付けている。
次程	学習内容と問い			評価の観点 関 思 技 知
第5次	【学習内容】気候要素と気候因子について理解する。			◎
	【本時の中心となる問い】気候に影響を与えるものは、どのようなものがあるだろうか。			

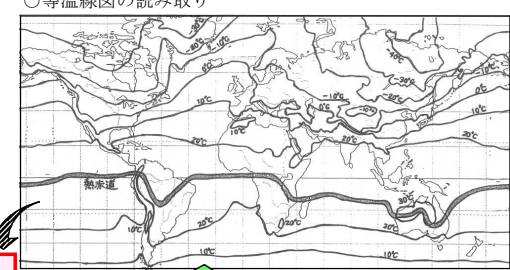
過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入	【問い①】気候は何によって説明できるだろうか。		
	○気候要素の種類	○気候は気温・降水・風などにより表されることを理解する。	
展開	【問い②】気候に影響を与えるものは、どのようなものがあるだろうか。		
	○気候因子の種類	○緯度・高度・地形・海流等が、気候に影響を与えていることを理解する。	○本時の展開時に必要な知識であることを踏まえさせる。
展開	○等温線図の基礎知識	○受熱の理論により、等温線は緯度と平行となることを理解する。	
	【問い③】緯線と平行であるはずの等温線に歪みが見られるのはなぜだろうか。		
まとめ	○等温線図の分析	○次の①～③の手順で等温線図を分析する。 ①ワークシートの等温線図を観察し、歪みが見られる部分を丸で囲む。 ②歪みが生じている理由をワークシートに記述する。 ③ペアをつくり、考察した内容を発表し、自己の考えを修正したり深めたりする。☒	○地図帳を活用し、歪みのある地点の情報を考察の手掛かりとさせる。
		○暖流の付近は高温、寒流の付近は低温、高地は低温など気候因子が世界の気候に影響を与えていることを確認する。☒・☒	○次回の降水量についても気候因子が関わることを踏まえてまとめる。

教材活用の工夫

○ ワークシートにおいて、自然環境に関する事象について、傾向とその要因に着目し、考察させたこと。

【ワークシート】

○等温線図の読み取り



等温線の歪みが生じている場所を探し出し、丸で囲む作業を行う。

○気候因子の考察

歪みが確認できる場所(番号)	気候因子	説明

等温線の歪みが確認できる場所で、「どのような気候因子が周囲の気候に「どういった影響を与えているのか」について考察し、論述させる。

○地図帳の活用

(3) 義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための指導例

高等学校学習指導要領の教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項に、学校や生徒の実態等に応じ、必要がある場合には、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けることに配慮することが示されている。

ここでは、授業において、身近な地図を用いた作業的、体験的な学習により、基礎的・基本的な事項を身に付けさせるとともに、学習意欲の向上をねらいとした取組例を示す。

【地理Aにおける取組例】

●単元の指導計画

単元名	日常生活と結び付いた地図
単元の目標	身の回りにある様々な地図の収集や地形図の読図、目的や用途に適した地図の作成などを通して、地理的技能を身に付けさせる。

○中学校学習指導要領及び中学校学習指導要領解説社会編から、義務教育段階での学習内容を把握する。

○中学校の教科書や資料集等の中から、活用できる教材を検討する。

次 程	主な学習内容
第1次	・様々な主題図の読解を通して、地図に慣れ親しむとともに、生活における地図の必要性を理解する。
第2次 (学び直し)	・学校所在地の地形図を活用して、地形図の読図に必要な基本的な知識と技能(16方位、等高線、地図記号、地形図上の長さや実際の距離の計算方法など)を身に付ける。
第3次	・学校所在地の旧版の地形図の読解を通して、自然地形の変化・土地利用状況の変化を読み取る。
第4次	・巡検を通して、学校所在地周辺の土地利用の変化の様子を理解する。

○知識の習得に当たっては、単なる知識伝達型の授業にならないように指導方法を工夫する。

(地図記号の場合)

- ・ICTを活用するなどして、主な地図記号の由来や時代による変遷を示しながら理解を促す。
- ・地図記号の由来を理解した上で、「図書館」「老人ホーム」などの地図記号を考察させる。

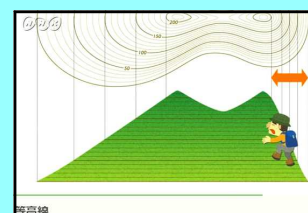
(ICTの活用例)

「NHK for School クリップ」

- ・地図記号の由来 (48秒)



- ・等高線の読み (1分15秒)



URL <https://www.nhk.or.jp/school/clip/>

- 巡検により、周辺地域の地形や植生の様子や「記念碑」「役場」「神社」などの地図記号を実際に目で確認することにより、地形図の読図に慣れさせる。
- 実物の水準点を確認しながら、水準点が設置されている理由を考察させる。
- 巡検によって得た情報を、次の学習内容である「生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に活用する。

Topic

国立教育政策研究所教育課程研究指定事業「伝統文化教育」の取組について

- ◆ 現行の高等学校学習指導要領の地理歴史科日本史Bの目標においては、「(中略)我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」ことが示されている。

北海道松前高等学校では、平成27年度からの2年間、「総合的な学習の時間」で行う「松前の学習」を軸として各教科・科目等が連携し、地域の伝統文化に関する教育に学校全体で組織的に取り組み、地域の実態に即した教育課程編成及び指導方法等の工夫改善に資する実践研究を行った。

ここでは、研究の主題、具体的な取組、生徒の主な感想及び研究の主な成果について示す。

研究の主題

- 地理歴史科と専門家(行政・大学)との連携を取りながら、歴史的背景を踏まえて指導するなど、伝統文化を多面的に把握させ、その価値を理解させる。
- 伝統文化の担い手として、これまで生活してきた地域住民と生徒との多様な交流の機会を設け、生徒の地域の伝統文化に対する見方・考え方を再考させ、生徒の生涯にわたって郷土を尊重していく態度の育成を図る。
- 伝統文化の学びから、生きた知識と技能を将来どのように役立てることが可能かを考えさせ、伝統文化が私達の自己アイデンティティの形成に繋がっていることを理解させ、他地域の伝統や文化へも寛容な心を養わせる。

地域考察の取組

- 到達目標: 現在の松前の実態を踏まえつつ、様々な観点から自分たちの住んでいる町について理解を深める。
- 学習内容: 観光ガイドをゲストティーチャーとして招き、松前公園の地域巡検を行い、松前藩屋敷や松前城を見学した。見学後、松前町のホームページや文献、地域の住民の声や産業に携わる人、観光客の声を参考にし、松前町の魅力や実態について考察し、発表した。

【藩屋敷を見学する様子】



小学校交流授業の取組

- 到達目標: これまでの学習を通じて得た知識や思いをもとに、次世代を担う小学生に郷土への考えを伝えることができる。
- 学習内容: 「紙芝居」「松前祇園ばやし」「松前祇園ばやしのプレゼン」のカテゴリを設定し、グループごとに伝統文化に関する知識・技能を習得したり、歴史的背景を調べたりして、発表資料を作成し、町内の小学生に発表した。

【小学生に発表する様子】



生徒の主な感想 (伝統文化に対する思い)

- 何かしらの形で伝統文化に関わりながら生きていくことで、自分にとって伝統文化がかけがえないものになった。
- 最初は、伝統文化が具体的に何を示すのかが分からなかったが、先人から受け継いで、次の世代に伝えながら残るものだとことが分かった。

研究の主な成果

- 松前の伝統文化の学習を通して、伝統文化に対する価値を感受した生徒の発言や文章等が段階を追って、随所に見られるようになった。
- 伝統文化が自分たちの生活や人生に深く関与していることを認識し、自己のアイデンティティを捉え直している生徒の様子や、伝統文化に対する尊敬の志を抱く態度が養われた。

[参 考] 北海道松前高等学校のウェブページ (<http://www.matsumae.hokkaido-c.ed.jp>)